

日本看護歴史学会 會報

日本看護
歴史学会
第41号
2003年11月1日

第17回大会

日本看護歴史学会第17回大会を終了して

小山敦代

日本看護歴史学会第17回大会は、さわやかな初秋の9月5日(金)・6日(土)に青森県立保健大学において開催された。テーマは“看取りの文化—古代から現代へ”であり、参加者は179名であった。

ライダー
島崎玲子
大会長挨拶は、はじめに亀山美知子氏の訃報と本学会設立、ならびに永年の代



表幹事や看護歴史研究における多大な功績をたたえられた。そして、本大会は、日本の看護の原点とその変遷をとおして看護の本質とは何かを追及したいという会長としての熱い想いが語られた。続いて、青森県立保健大学の道幸恵学長から歓迎の挨拶があり、第17回大会の幕が開いた。

特別講演Iの松木明知氏(弘前大学)による「八甲田雪中事件—特に第5連隊と第31連隊による捜索活動について—」では、真実を知る観方に迫力があり、科学的な論理的思考と歴史から学ぶことに感銘を受けた内容であった。

パネルディスカッションは、「占領軍GHQ公衆衛生福祉局の医療看護政策と現在への影響」をテーマとし、ライダー島崎玲子氏、大石杉乃氏、川島みどり氏、平尾真智子氏により、GHQによる看護改革が看護実践、看護教育にどのように影響を及ぼしてきたか、それぞれの立場や実践活動、研究を通して語られた内容は興味深く、改めて、看護改革の理念の継承と時代の変遷の中で看護に求められている本質を結びつけて再考する機会になった。

2日目の午後には4分科会が開催され、「看護に関する法律の変遷」「史料の力」「診療報酬の推移と看護の評価」「男性の看護参画」について、各々の会場で、工夫を凝らしたプレゼンテーションと活発な意見交換が行われた。

特別講演IIの新村拓氏(北里大学)による「看取りの文化とその歴史」では、病と死に焦点が当てられ、まさに高齢社会の現在、看護者にとって興味深

く示唆に富む内容であった。また、口演8題、示説6題の一般演題発表と、貴重な写真の展示は、それぞれ関心が高く人を引き寄せた。

本大会は、学生による発表や若い看護師、男性看護師によるセッションなど看護歴史への関心の広がりが見られ、本学会の発展に期待をさせて幕を閉じた。

大会終了にあたり、会員の皆さま、ご協力いただいた方々に感謝申し上げます。

新刊のご案内

戦後日本の看護改革

封印を解かれたGHQ文書と証言による検証

ライダー島崎玲子・大石杉乃編著

定価8,000円(日本看護協会出版会)

本書はGHQ文書を中心に膨大な史料と関係者の証言に基づき、戦後日本の看護改革を検証する歴史書である。

特別講演I

真実への追求30年 — 八甲田雪中行軍事件 —

木村紀美

1902年(明治35年)1月下旬、青森市に駐屯する歩兵第5連隊、第2大隊隊長山口少佐以下210名の将兵は、冬期耐寒訓練のため雪中行軍を開始した。当日は午後から猛吹雪となり行軍の続行が困難との判断から山中に露営し、翌朝午前2時半に露营地を出発した。

しかし、吹雪は益々猛烈となり、周囲は暗く、何も見えずそこから彼らの「死の彷徨」が始まった。遭難から13日目までに凍死者193名と山口少佐を含む生存者17名が発見された。生存者は現場で応急処置を受け衛戍病院に搬送されたが、入院中6名が死亡した。凍傷の応急処置は、記録からみて現代医療に劣るものではなかったという。ただ、この遭難事件の一番の原因が、様々な原因はあるものの指揮者の判断ミスであったと言われる。判断の重要性に関しては、看護職者にとっても同様である。

30年間の月日を費やし、真実を追求していった松木氏の多大な資料に基づいた陸軍省の調査結果報告や山口少佐の死は、自殺とは考えられない、という論証には説得力があった。

松木氏は、真実を知る、記録を辿っていく、記録するということを随所で話されたが、看護の歴史を語る時、また歴史を歩む時もそのことは必須条件であると思った。

特別講演 2

新村 拓「看取りの文化とその歴史」を聴く

川島みどり

『看護』という語句が、1817年「吐方論—喜多村鼎」以来のものであると聞き、ルーツ探索を心がけながら、これは迷宮であったと先ず恥じ入った。人々の生活の中から生まれた専門職を標榜するなら、わが国の歴史と文化をふまえた看護の変遷を見据える必要があると痛感した。

〈講演概要〉

『看取りの文化』は、人間の誕生から死、そして死後に至るまでを視野に入れたもので、人々の努力によって伝承され築かれてきた。家族看護から始まったごく個人的な営みが、不特定多数を対象にすることにより変化を迫られ、誰に対して何をするのか、その費用はどうするのかといった、いわば看護の概念化というものをいち早く行ったのが仏教であった。出家集団による看護作法が、在家の信者の間にひろまって、死への看取りへの関心となり、看護次第で往生のさまが異なることから、一人前の大人になるために、看護の知識や方法を学ぶことが必要とされてきた。

『看護用心抄』によれば、看取ることが病人の心や体の痛みを癒し、往生という救いを伴った死を結果し、看取る行為自体によって看病人も救われることに通じるという。こうして、時代の変遷とともに変化してきた看取りの文化が、現代にあっては喪失したともいえ、家での死の看取りが困難になってきている。

静かな語り口の最後は、現代の政策誘導ともいえる病院死から在宅死への転換を、あらためて文化として根付かせることの意義についてであった。ご尊父の在宅ケアの体験からのものであろうとは、事前に読んだ先生の著書から想像した次第であった。

(特別講演の全容は、看護歴史学会誌次号に掲載予定である。)

〔訃報〕



本学会創設から第4期まで12年間にわたり代表幹事を務められた亀山美知子さんには、かねてより療養中でしたが、2003年7月21日に逝去されました。謹んで哀悼の意を表し、会員の皆様にご報告いたします。ご葬儀

は7月30日、故郷の島根県浜田市にある菩提寺の地久寺で行われ、御遺骨はご両親のもとに埋葬されました。御戒命は「天真院知教妙恵大姉」です。

亀山さんは我が国の看護史研究の第一人者であり、彼女の働きなしには本学会の存在も、また看護史研究の今日もあり得ないと思います。看護史研究にお

ける多大な業績を讃え、ご指導に感謝し、ご冥福をお祈り申し上げます。9月7日の第17回総会において御遺影を飾り、参加会員一同で黙祷を捧げました。
(代表幹事 山本捷子)

分科会 1

日本の看護に関する法律の変遷

話題提供者の田中幸子氏は、看護政策研究の資料となる人材の養成と確保、資格制度に視点をあて、「保助看法改正過程」と「人材確保法の立法過程」について報告された。

予想以上の参加者で、埼玉県岸本姉からは人材養成に関して、歴史的に貴重な発言があり、参加者一同制度・政策に関する知識を共有することができた。このような学習から、将来、看護職が政策を立案できるように人材を教育・育成していくことも重要であると考えます。
(木村紀美)

分科会 2

史料の力 — 地域看護学概論に史料教材を用いて

当日会場の両壁には掲示を承諾した学生50余名の「歴史新聞」が張り出された。この新聞には学生が地域看護の先達から学んだこと、史料との対話から次の2つの課題にそって記事をまとめたものである。

1. 日本の地域看護の始まりはどこか。
2. 歴史から学んだこれからの地域看護活動。

分科会の前半はこの課題に対する学生の紹介が紹介された。1に対しては、関東大震災(1923年)後の済生会巡回看護を中心に、大日本私立衛生会、派出看護婦会から朝日新聞社公衆衛生訪問婦協会まで多様であった。どこを始まりとしても根拠が明確であれば良しとした。つまり、学生自身が「地域看護とは何か」を考えることが主要なねらいだからである。

しかし、この点に関しては参加者から、「史実として後からでもきちんと年代を抑えるべきではないか」「どの観点から考えるのかを示した方がいいのではないか」などの助言や意見が出されるなど、約20名の分科会であったが、歴史学会の名にふさわしく、熱い議論がかわされた。

2について、多かった順に学びが紹介された。「ニーズに添っていくことの大事さ」「時代背景を知ることが基本」「住民主体の考え方」「現場主義(足を把握すること)」「地域看護の対象は地域住民主体である」「自立をめざした援助の必要性」、さらに「歴史に照らしてみる、プロセスとしてみる、問題意識をもってみる」などである。

これらの中には、史料を用いずとも概論で学べるものも多いといえるが、しかし、「時代背景を知るこ

とが基本」やものごとを「歴史に照らしてみる、プロセスとしてみる、問題意識をもってみる」など、史料を通してでなければ、おそらく出てこないのではないかと思われることも多い。改めて史料の力を見直した分科会であった。(山本春江)

分科会3

歴史的視点の重要性をあらためて確信して……

精神看護学を教授している一教員として、看護の歴史的視点の重要性については授業の中で繰り返し述べてきた。歴史的考察の意義として、①現状における問題点の根源を探ることができる、②歴史的発展の過程で克服されたはずの問題点を現状の中に見出すことができる、③ある種の問題点の根の深さを確認することができる、④「歴史は繰り返す」の言葉通り、歴史を訪ねることで将来の展望を描くことができる、⑤社会文化との関連において現象を捉えることができる、が挙げられる。今回、担当させて頂いた分科会「男性の看護参画：看護師から看護師へ」も、正にこれらの意義に合致したテーマだった。多様なアプローチが可能であり、時間の制限もあって十分な参加者との議論は叶わなかったが、今後とも継続して話し合うべき課題で、参加者全員がそういう感慨を抱きながら散会した分科会だった。可能ならば、今後とも学会への参加や話題提供をしたいと思う。(瀧川 薫)

研究発表1

研究発表(口演)のNo.1~4では、まず、端丸瑞恵氏の「創設から占領開始前までの日本・アメリカ・国際赤十字の歴史的推移」は、GHQが占領政策遂行時に日本赤十字社を連携組織として視野に入れた背景事情の発表であった。また、大嶺千枝子氏の「本土復帰前の沖縄における看護関係法と本土法との比較」は、復帰前の沖縄の看護の特徴を、戦後発布の看護関係法令と本土法を比較検討し、仲本勉氏は「沖縄の男性看護職の歴史と現状」として、沖縄の男性看護職の比率が高い要因を考察した発表であった。これらは、戦後の看護職発展過程を歴史的にきめ細かく分析したものである。さらに、庄子幸恵氏の「介護職の資格制度の成立過程とそれに伴う介護職と看護職の業務上の重複発生経緯の検証」では、今後さらに接近する看護職・介護職間の連携等の重要性を示唆した発表であった。いずれの発表も、大変興味深く、質問も多く、活発な討議がなされた。(岡山寧子)

研究発表2

私が担当させていただいたのは、口演8題の内、「兵庫県における看護婦養成の歴史」(栃木県にお

ける高校衛生看護科の経緯の検証)「慈善事業家石井十次の日誌からみた京都看病婦学校と同志社病院の看護の状況」「看護学生組織の変遷」の4題(題名筆者簡略)であり、いずれも興味深い報告であった。中でも高校衛生看護科の経緯、看護学生組織の変遷は、まさに看護教育が社会情勢と大きく関与していることを提示した。また、若々しい学生の発表は、本学会に新風が入り楽しさと明るさを増した。(小山敦代)

新入会員紹介(敬称略)

※()内は会員番号

林 猪都子(03-005)	木村 哲也(03-016)
山本 準子(03-006)	後藤 眞澄(03-017)
大澤 豊子(03-007)	永 美佐子(03-018)
吉堀山加里(03-008)	松原みゆき(03-019)
坪井 良子(03-009)	峰岸まや子(03-020)
[山梨大学大学院]	縄田 園美(03-021)
佐藤公美子(03-010)	彦坂 蔦枝(03-022)
[山梨大学大学院]	赤沢 陽子(03-023)
東 美香(03-011)	横川たつえ(03-024)
安藤 一博(03-012)	杉山 恵子(03-025)
高橋佐智子(03-013)	古賀 幸子(03-026)
[行岡医学技術専門学校]	川上 裕子(03-027)
高田 洋子(03-014)	[お茶の水女子大学大学院]
[久米田看護専門学校]	石田 昌宏(03-028)
田邊 輝子(03-015)	[日本看護連盟]
[大阪保健福祉専門学校]	

◆事務局便り◆

1. 会費納入のお願い
今年度会費を郵便振替口座(01010-1-52185 日本看護歴史学会)へお振込みください。3年以上会費を滞納すると会員登録を抹消されますのでご注意ください。
2. 住所確認
以下の会員の方は至急、連絡先を教えてください。88018 伊藤幸子様、95014 古米照恵様、02005 鈴木山美子様
3. 事務局に新たにアルバイトの方が入りました。
江口要子さんです。しばらく角井登美子さんといっしょに作業をやっていただき、いずれ定期的に事務局の窓口となっていただきます。よろしくお願ひします。
4. その他
最近、学会誌購入の問い合わせが多くなっています。会員外の方からの看護歴史・学会に関する関心も高まっているようでたいへん嬉しく思っています。(事務局 田中幸子)

新刊のご案内

日本における義肢装着者の生活援護史研究

坪井良子著

A5判・230頁 本体8,500円(税別)

明治から昭和までの80年間にわたる四肢切断者の生活支援を通して、義肢の発達と制度の歴史並びにわが国独自のリハビリテーション史を追究した総合援護史研究として最初の書。

日本看護歴史学会 2003年度予算

'03.4.1~'04.3.31 (単位:円)

収入の部

項目	予算額	摘要	前年度決算額
会費	680,000	4,000×170名	948,000
寄付金その他	40,000	学会誌等の売上げ	258,850
前年度繰越金	1,253,508		1,138,720
合計	1,973,508		2,345,570

支出の部

項目	予算額	摘要	前年度決算額
幹事会開催費	250,000	年2回	402,077
編集委員会開催費	100,000	年4回	21,890
出版費	660,000		240,240
会報発行費	(60,000)	年2回	(61,110)
学会誌発行費	(600,000)	第16号、第17号	(179,130)
会員名簿作成費	0		0
事務経費	530,000		346,885
印刷費	(50,000)	封筒、会員カードその他	(37,800)
通信費	(150,000)	会報2回、学会誌2回	(107,020)
人件費*	(200,000)		
文具・その他	(130,000)	文具・振込み手数料・大会物品の運送費、交通費等	(202,065)
諸会費*	80,000	看護系学会連絡協議会	
予備費	353,508		80,970
合計	1,973,508		1,092,062

*新規に設定した項目

日本看護歴史学会 2002年度決算報告

'02.4.1~'03.3.31 (単位:円)

収入の部

項目	予算額	決算額	差引額
会費	680,000	948,000	268,000
		会員21411、新入会員2311	
寄付金その他	40,000	258,850	218,850
		学会誌売上げ(40,720) 定期満期等利子(218,130)	
前年度繰越金	1,138,720	1,138,720	0
合計	1,858,720	2,345,570	486,850

支出の部

項目	予算額	決算額	差引額
幹事会開催費	500,000	402,077	97,923
編集委員会費	100,000	21,890	78,110
出版費	660,000	240,240	419,760
会報発行費	(60,000)	38号、39号(61,110)	
学会誌発行費	(600,000)	第15号(179,130)	
会員名簿作成費	0	0	0
事業経費	370,000	346,885	23,115
印刷費	(50,000)	(37,800)	
通信費	(170,000)	(107,020)	
文具・その他	(150,000)	202,065	
予備費	228,720	80,970	147,750
		看護系学会連絡協議会	
合計	1,858,720	1,092,062	766,658

次年度への繰越金 2,345,570円-1,092,062円=1,253,508円

第18回大会予告

開催期日 平成16年8月25日(水)~26日(木)

メインテーマ 「歴史に学ぶ・歴史を創る」

会場 北里大学相模原キャンパス L-3号館

内容

◎講演

北里柴三郎博士：中瀬安清先生(北里大学名誉教授)

◎パネルディスカッション

テーマ：オーラルヒストリー；看護歴史学研究の一方法

パネリスト：交渉中

◎交流セッション

いくつかのセッションを設けます。セッションの中のゲストスピーカーに次の先生をお呼びしております。

金子光先生(元厚生省看護課長、元衆議院議員)

高橋シュン先生(聖路加看護大学名誉教授)

◎研究発表(口演・示説)

◎写真展

多くの方のご参加と発表をお待ちしております。参加申し込みや演題募集などが確定しましたら順次お知らせいたします。

お問い合わせ先：〒228-0829 相模原市北里2-1-1
北里大学看護学部基礎看護学研究室
Tel & Fax 042-778-9432

◎交通機関

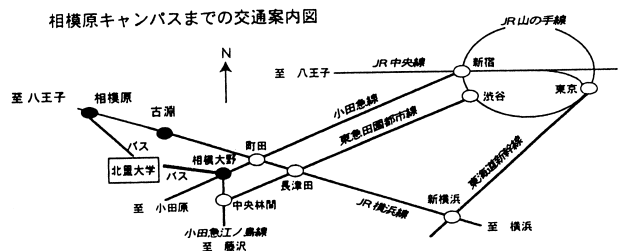
小田急線新宿駅より相模大野駅下車(急行で40分)

相模大野駅より(バス乗車25分 北里大学下車)

バス1番乗車 北里大学病院行、昭和橋経由上溝行、
北里大学經由相模原駅南口行

バス2番乗車 古山經由相模原駅南口行

タクシー 15分



日本看護歴史学会会報 第41号

企画・編集・発行責任者 山崎雅代・藤村龍子
大石杉乃・田中幸子

事務局 〒228-0829
神奈川県相模原市北里2-1-1
北里大学看護学部 田中幸子
Tel & Fax 042-778-9876

編集後記

今回発行の会報41号より、念願のA4判、横書きとなりました。投稿者の方が書きやすく会員の方々が読みやすい会報をと、心掛けたつもりですがいかがでしょうか。記事は第17回大会を臨場感をもって伝えたい、という力のこもった記事ばかりで今回不参加の会員の方々に充分伝わったと思います。(雅)